國學院大學学術情報リポジトリ

フロイト読解ノート：精神分析と考古学

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋吉, 良人, Akiyoshi, Yoshito メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000011

フロイト読解ノート：精神分析と考古学

秋吉良人

拙論「フロイト読解ノート：タイラー（「残存」）とダーウィン（「痕跡」）」[1]でみたように、フロイトの創出した精神分析は、ダーウィンらの進化論同様、人類の進化および個人の発達を、過去の「痕跡」や「残存」を手掛かりにして再構成するものだった。しかし、こうしたアプローチは進化論に限ったものではなく、考古学など、19世紀の花形学問が共有する思想的なパラダイムに属するものである。[2]本論では、引き続きこの文脈において、フロイトと考古学の関係について考察してみたい。

考古学と遺跡

フロイトは大地の中から掘り出されたものに特別の愛情を抱いた。古代の「遺物」である。そのコレクションに彼自身「中毒」とさえ呼んだほどの情熱を注ぎ、書斎と診察室は収集品で溢れかえった。彫像やオブジェ、エジプト起源の「考古学的遺物」がところ狭しとならぶ彼の診察室に「考古学者の書斎」を見い出した「狼男」に限らず、そこを訪れた人々は一様に驚きの声をあげた。[3]そればかりかフロイトは「机に座ると、小彫像

を目で愛撫したり、実際に手で撫でたりした。ときには、新しく仕入れた物を食堂に持ってきて、眺めたり触ったりしていた。[4]」彼は狼男にこのような彼の「偏愛」と精神分析の関わりについて語っているが、それは、精神分析家は発掘にたずさわる考古学者と同じように、最深部に埋もれている貴重なものにいたるまで患者の心の層を一つ一つ掘り起こしていく、というものであった。

この趣味は同時に知的、体系的なものでもあった。フロイトは年に一度彼を訪ねてくる友人の考古学者エマニュエル・レヴィと刺激的な晩を過ごすのを常としたし、[5]ブルクハルトの『ギリシャ文化史』に傾倒して、「あらゆる人間的形態における先史時代への偏愛」を語っている。[6]晩年には、シュテファン・ツヴァイクが『精神による治療』で描いた彼の小市民的姿に抗弁し、自分がもっと複雑な人間であることの例として、頭痛もちで、大変な喫煙家であることのほかに、倹約もせず、ギリシャ、ローマ、エジプトの古代遺物の収集に多大な無駄遣いをし、年に一度はローマに滞在していたことのほかに、心理学よりも考古学の本を読んだことを挙げている。[7]心理学よりも考古学の本を読んだという点の信憑性はわきにおこう。ここでフロイト自身「倹約もせず」と書くことで暗に遺物への偏愛が「肛門愛」的な根を持っていたことを匂わせているように見える。さらにここで興味深いのは、フロイトが、自分の真の姿を伝えようと思ったときに、「考古学」「古代遺物」「ローマ旅行」との関わりを取り上げたことだろう。

しかしゲイによれば、フロイトの「考古学」への偏愛が意味を持つのは、生涯に渡る彼の仕事のメタファーとしてであった。ゲイは、その例として、１８９６年にウィーンの医師たちを前に「ヒステリーの病因」について講演したとき、フロイトが「*Saxa loquuntur !*」（「石は語る」）と叫んだこと、フリースへの書簡の中で、分析の成功をシュリーマンのそれにたとえたことなどをあげている。また、フロイトの古代遺物収集においては仕事と趣味上の楽しみが合流していたと述べている。[8]このメタファーについては、「社会的に位置付けられた知に結び付けることによって精神分析を合法化しようとする[9]」彼の戦略を読み取るうがった評者もいる。しかし「考古学」は、フロイトの精神分析にとって本当にたんなる説明のための比ゆ、あるいは正当化の手段としてのみ意味をもったのだろうか。

まず、フロイトがどのように考古学をメタファーとして用いたかを確認しておこう。

ゲイの言うようにフロイトが「*Saxa loquuntur !*」（「石が語る」）

と叫んだのは、ヒステリーの病因を探るとき従来とられてきた方法、すなわち患者本人やその家族に直接病気の経緯を聞くというほとんど信頼できないやり方に対して、フロイトが自身の方法 — 彼はそれを「精神分析」と名づけたばかりである—を、「考古学」という「他の研究領域で現実になされた新たな進歩を内容とするたとえ話」を用いて説明したさいのものである。長くなるが全文引用したい。

> 壁の残骸 Reste、柱の断片などからなる廃墟を前にして興味を抱いた探検家は、目に見える部分だけで満足し、周辺に住むなかば野蛮な住人に、伝承が教えるこの記念碑の残骸 monumentalen Reste の歴史と意義をたずね、それをメモした後、ふたたび旅に出ることができるだろう。しかし他のやり方もある。彼はつるはしやスコップをもって行き、住人を働かせて、目に見える残骸 Rstesn から埋もれたものを覆いのない状態にすることもできる。そしてうまくいけば、発見されたものは自らを注釈する sich erläutern。壁の残骸は宮殿の城壁をなし、残った柱から寺院が出来上がり、大量に発見された二言語による碑銘は、アルファベットと一つの言語を明らかにするし、その解読と翻訳から、そのためにこれらの記念碑 Monumente が建てられた出来事についての確かな情報がえられる。« *Saxa loquntur* »（「石が語る」）のである。[10]

分析において「目に見える残骸 Rstesn」とは、患者の症状、記憶の断片、夢、連想中の思いつきなどである。フロイトは他のところで言っている。

> ほとんどすべての症状は、情動をともなったある体験の残滓 Reste、あるいはこう言ったほうがよければ沈殿物 Niederschläge として現れます。そのために私たちはそれを後に「心的外傷」と名づけたのです [...]。それ［症状］はいくつかの光景によって、専門用語で言うように「決定されている」のであり、症状はその記念となる（遺）跡 Gedächtnisreste を構成しているのです。
> ぼくには、夢の生活は生物学的に例外なく人生の先史的時代 prähistorishen Lebenzeit（1歳から3歳）の残滓 Resten に由来するように思えます。この時期は無意識の源泉であり、それだけですべての精神神経症の病因を宿します…。[12]

精神分析は、それまでは何の意味も与えられることなくただ心の屑として打ち棄てられてきたこれらのReste を起点として、精神の諸層を掘り進み、埋もれた記憶を発掘していく。そして考古学が忘れられた人類の過去を復活させ新たな歴史を再構成するように、患者の幼年期―フロイトはこれを個人の「原始時代」「先史時代」（Urzeit, Vorzeit）と呼んだ―を再構成するのである。

ところで、フロイトは、このようなメタファーを、彼が「精神分析」という独自の方法を創造しつつあったまさにその時点で、すでに用いている。『ヒステリー研究』（一八九五年）中の「エリザベート・フォン・R嬢の症例」（一八九二年秋開始）で、フロイトは書いている。

> 私が企てたこのヒステリーの最初の完全な分析において、私はのちにひとつのメソッドにまで高め迷わず導入したあるやり方、すなわち病因となる心的素材を層ごとに取り除いていくというやり方に到達した。私たちはそれを好んで、埋もれた都市を発掘する技術に比較したものだった。私はまず患者が知っていることを語らせ、つながりが不可解なところ、因果の連鎖の中で環が欠けているように見えるところに入念な注意を払った。ついでそれぞれの個所で、あるいは催眠術による探求・踏査、あるいはそれに類似した技法によって影響を与え、記憶のより深い諸層に分け入った。[13]（傍線引用者）

フロイトは、エリザベートの主症状である脚の痛みを動機づけるさまざまな光景の記憶の層を掘り起こし、まさに「ミッシング・リンク」を発見していくのである。しかしこのようなフロイトの言葉を聞くと、考古学の比喩は、精神分析の方法が確立された後に、それを説明、正当化するために事後的に採用されたというよりも、むしろ患者との治療作業中に、そのあまりの類似に対する驚きとともに生まれたものであると思えてくる。

一九〇五年、フロイトは次のように書いている。

> 分析結果の不完全さに直面して、私には、ひどく損なわれてはいても測りがたい価値をもつ古代の遺物を、きわめて幸運にも、長く葬られた状態Begrabenheit から明るみにもたらしえた研究者の例に従う他にはなかった。私はこの不備を、他のもろもろの分析から私に知られた最良の範例

にしたがって補ったが、どの場合も、良心的な考古学者と同様に、真正な部分に私の構成が付け加えられているのはどこかを示すことを怠ることはしなかった。[14]

考古学のメタファーは、暗中模索で作業を続けるフロイトの前に、彼が進んでいる道をはっきりとさせ、彼の発見を導く（heuristique）、範例的学問だったのではないだろうか（彼のいわゆる心の層理論が、考古学的な発想に導かれて生み出されなかったという保証はどこにもない）。

石は語る

ところで、フロイトは記念碑の残骸が語るように症状も語る、ということを言うのに、ラテン語で《*Saxa loquuntur !*》（「石が語る」）を引用している。この句がどのようなテクストの名残（Rest）なのか、フロイトの独、英、仏全集も、またこの句を印象深いものとして二度にわたって取り上げているゲイも、さらにはフロイトによる聖書への言及のきわめて網羅的な検討を含むプフリマーの『フロイト、聖書を読む』[15]でさえも何も記していない。今聖書といったが、この句は、田中秀央、落合太郎編著『ギリシャ・ラテン引用語辞典』によると、ウルガータ聖書の「ルカによる福音書」中の文句である。[16]「私はあなたたちに言う、もしこれらの者が黙れば、石が叫ぶだろう。」（一九・四〇）。[17]これはイエスがエルサレムに入城する際、彼の弟子たちが自分たちが見た力・業と神を賛美し、主によって来られる方（イエス）を祝福し始め、それを見咎めたファリサイ人から彼らを叱るよう言われた時、イエスが言い放った言葉である。

ここからフロイトがこの句を引用した二つの意味が明らかになるだろう。

まず、「石が語る」という句が明示的に語るところは、症状や夢が、記念碑の目に見える残骸 Reste、「遺跡（石）」と同様自らの来歴について語っているということであり、とくにそれは、患者が語らずとも、あるいは彼／彼女のことばが押さえ込まれれば込まれるほど、叫び、語るということである（エリザベートが黙ると「足が語り始める」[18]）。

しかしこの句は、さらにそれと考古学との関係付けは、フロイトの願望そのものに関わっている。このウィーンの精神医学・神経学会には偉大なクラフト＝エビング他お歴々が列席し、フロイトの意気込みも生半可なものではなかった。しかし聴衆の反応は冷たかった（とフロイトは感じた）。ゲイはこの講演の

首尾について、「色鮮やかな雄弁と科学的謹直さを巧みに織り交ぜた彼の講演も空振りに終わった」と述べているが、それにしてもフロイトの落胆はあまりに強く、長引き、また聴衆にたいする憎しみは極端だった。フロイトはフリースに書いている、「精神医学界でのヒステリーの病因に関する講演は、あの間抜けどものところで冷ややかな応対を受け、クラフト＝エビングからは、科学的なメルヒェンのように聞こえるという妙な評価を頂戴しました。それも、ひとが何千年も前からの問題の解答、ナイル川の水源を示してやったあとにですよ！婉曲的に言えば、やつらとはみんな絶好だ。[19]」

では、フロイトがどのような願望をもってこの講演に臨んだか。それはエルサレムを目前にしたイエスが「石は語る」と語った状況と考えあわせれば次のようにはならないだろうか。心の考古学者として、何人も解き得なかった病の謎を解き明かし、医学界に「救世主」（「ユダヤの王」？）として登場した自分を、ひとびとは歓喜の歌を歌いながら迎えるはずだ・・・。

「石が語る」の引用が意味するのは、ゲイの言う「謹直さ」とは正反対の、フロイトの野心であり成功への過信なのではないだろうか。もしフロイトがイエスと自分を重ね合わせたのではなかったとしても、[20] ただくわとすきを手にして土砂の中に埋もれていた都市を発掘し、書かれた公の歴史を塗り替えていった考古学者らが得た名声と同じほどの名声を求めたのであり、フロイトの常軌を逸した失望と怒りは、その挫折に起因する。このことは、フロイトをただひたすら真理を追究する一人の偉大な天才として描き出そうとするゲイや彼が依拠したジョーンズらの「英雄」主義にたいする戒めとして、記憶すべきことであろう。

この後も、考古学のメタファーは、フロイトの理論の変遷とともにその形を変えていく。しかしこれを論じるのはまた次の機会とし、ここでいったん筆をおきたい。

フロイトからの引用は *Gesammelte Werke*, 18Bände,S.Fischer Verlag, Frankfurt am Mein, 1940-1952によった（以下GWと記す）。邦訳タイトルは『フロイト全集』（岩波書店、二〇〇七年―）に準拠した。この『フロイト全集』はGWのページを併記しているので、後者のみ記す。

注

（1）『國學院雑誌』第一一四巻第十二号、二〇一三年一二月。

（2）カルロ・ギンズブルグ「徴候 ― 推論的パラダイム」『神話・寓意・徴候』竹山博英訳所収、せりか書房、一九八八年、一七七・二二六頁参照。

（3）Yann le Pichon et Roland Harari, *Le Musée retrouvé de Sigmund Freud,*

Stock, 1991, pp.13-14.

（4）ピーター・ゲイ『フロイト1』鈴木昌訳、一九九七年、みすず書房、二〇一頁。

（5）一八九七年一一月五日付書簡。Sigmund Freud, *Briefe* 1873-1939, S.Fisscher, 1968, S.300.

（6）一八九九年一月三〇日付書簡。*Ibid.*, S.374.

（7）一九三一年二月七日付書簡。*Ibid.*, S.421.

（8）ピーター・ゲイ『フロイト1』二〇二頁。

（9）Sofia Stril-Rever, *Le Refoulé de l'Histoire*, Ramsay, 1990,p.90. 菅野賢治『ドレフュス事件の中の科学』青土社、二〇〇二年、二九九頁による。

（10）«Zur Ätiologie der Hysterie», GW, I, S.426-427.

（11）«Über Psychoanalyse», GW,VIII,S.11.

（12）一八九八年三月一〇日付フリース宛書簡。*Briefe an Wilhelm Fliess*, 1887-1904, S. Fischer, Frankfurt am Mein, 1986, S.329. ここで言われている「生物学」的とはフロイトの「メタ心理学」＝「意識の背後に通じる心理学」を意味する。

（13）«Studien über Hysterie», GW,I,S.201.

（14）«Bruchstück einer Hysterie-Analyse», GW,V, S.169-170.

（15）Théo Pfrimmer, *Freud. lecture de la Bible*, PUF, 1982.

（16）田中秀央、落合太郎編著『ギリシャ・ラテン引用語辞典』、新増補版、岩波書店、一九六三年、六九二頁。もっとも、このラテン語聖書を見ると、当該の箇所は、dico vobis quia si hii tacuerint lapides clamabunt となっており、« *Saxa loquuntur !* » ではなく、« lapides clamabunt » である。このことの意味についてはまた別の機会に論じることとし、ここでは私が信頼する当辞典の記述を採用し、論じていきたい。

（17）新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』、岩波書店、二〇〇四年。

（18）«Studien über Hysterie», S.212.

（19）一八九六年四月二六日付フリース宛書簡。*op.cit.*, S.193. 実際フロイトはその後、精神神経学会のいかなる会合にも出席しなくなったという。

（20）もっともゲイによれば、フロイトの最初期の弟子であり、フロイト家での会合（後のウィーン精神分析学協会の前身）を提案したシュテーケルが自伝の中で、自分が「フロイトの使徒であり、フロイトはキリストであった！」と記しているという。『フロイト1』二〇三頁。